

上江洲家の書軸

池宮 正治

筆者は過去に上江洲家所蔵の書軸の一部を調査したことがある。故当間恵喜氏が修復を終えて県博物館の一室で最終の点検をしている時で、その際ついでに調査させてもらった。その結果は、昭和57（1982）年度の沖縄県教育委員会の文化財調査報告書第44集「扁額・聯等遺品調査報告書」に翻字して紹介したので、重複を避ける意味で、書軸の文面の紹介等は上の報告書を参考にしていただくことにして、ここでは繰り返さない。

その際その報告書で、筆者はその印象を「上江洲家の書軸は、詩人や歌人の書幅が一幅ずつとは言え、人数が多くしかもここにしかない唯一の自筆資料という点で、（中略）戦災を蒙った沖縄の現状からすれば、まさにミニ冷泉家と言ってよい」と述べたことがある。何も直ちに藤原定家の流れを引く冷泉家に匹敵する内容とは思ってはいない。質と量からみて、到底冷泉家のそれと太刀打ちできるものではないことは明らかである。だが、どうしてもこの比喩を使いたかったのは、やはり沖縄の詩人歌人の直筆の多さである。例えば宜湾朝保が編集した『沖縄集』には、いわゆる沖縄三十六歌仙と、『沖縄集二編』の109人の著名な歌人がいても、その自筆の歌資料となると、その中心人物である宜湾朝保以外はそれほど多く伝わっていない。というより多くの歌人はまったくと言っていいほどその自筆の資料を伝えていないのである。従って、これを、まるでタイムカプセルのように伝えているという意味で、規模ははなはだおぼつかないとは思いつつも、冷泉家を連想して賛嘆した次第である。

上江洲家の書軸は、大体四つに分けられるかと思われる。一は、同治8（1869）年に仲里間切総地頭で、後の三司官富川盛奎が久米島へ渡海したさい、当時上江洲親雲上が茶園を開きお茶の製造に成功したとして、これを首里那覇の貴紳に進上して詩歌を請うたことによる。『美済姓家譜』によると、茶園の経営そのものは、乾隆年間の初頭から行われているが、お茶の製造に成功したのは同治3年のことで、これを久米島の総地頭に献上したところ、首里城に転達されて、王府から産業として広めるようにという書付と国分たばこが上江洲親雲上に下賜されている。この度の茶はこれを受けたもので、盛奎はさっそくこれを歌の師匠である三司官宜湾朝保に告げ、その周旋で多くの詩歌を得たのである。

今回調査したものでこれに関するものは、①鄭元偉の七言絶句、②魏掌政の七言絶句二編と文、③蔡徳昌詩文、④蔡呈禎詩文、⑤蔡大鼎詩文（二軸）、⑥氏名不詳の詩文（ただし序のみあって七律三編を欠いている）、和歌では、⑦上里盛恕の和歌三首ならびに前詞、⑧護得久朝置の和歌二首、⑨豊村朝勅の和歌二首、⑩普天間助蔵の和歌三首ならびに詞書、

⑪宜野湾朝宏の和歌二首、⑫大宜味朝直の和歌一首、⑬宜湾朝保和歌一首、である。また『美済姓家譜』にはこの顛末が詳しく書かれており、詩歌を寄せた人の名が次のように出ている。

朝置護得久按司
朝保宜野湾親方
助蔵普天間親雲上
盛升村山里之子親雲上
盛怨上里親雲上
朝宏宜野湾里之子親雲上
憲詮仲尾次筑登之
東国興津波古親方
蔡徳昌湖城里之子親雲上
蔡大鼎伊計親雲上
蔡呈禎翁長里之子親雲上
魏掌政親雲上
盛奎富川親方

ここの仲尾次憲詮のものは見当たらないが、『沖繩集二編』に九首歌が取られている歌人であって、それ故⑥の無名氏はこの人ではなさそうである。また村山盛升の作品(『沖繩集二編』に十五首)もおそらく和歌と思われるが、残念ながら現存していない。それに、ここにはないが、上江洲家には、⑭鄭元偉の年代不詳の七絶もあって、この詩句に「新茗」とあることから、この際のもののように推し量られる。それに⑮向篤忠川平(後に伊江)朝重の漢詩も、若干の疑問はあるが、「茗葉」等の例からこの時のものと推測されるし、⑯僧と思われる良台の「万の事、さはらず拘らず、煩なき身と承り云々」の、禅問答のような和文も、文中に「よき茶などのみ」とあり、これにつながるとされる。

久米島は、中国との航海のさいに、往復ともに風持ちをするところである。家譜や評定所書文書や冊封使録にもそのことは見えるが、冊封使の航海のさいにも参考にした程順則の『指南広義』にもそのことが見える。久米島はしたがって、古来対中国航海の要衝であった。乗組員はしばしば上陸して、土地の名家であった上江洲家を訪ね、交流を深めている。1800年に来琉した冊封使①李鼎元の五絶、同じく②李鼎元書「仙霞嶺旧作」七絶、その従客の③禅僧寄塵の五字連句(二軸で連句)が残っている。他に、福州で有名な④謝曦の七絶、⑤閩中の林斉詔の五字対句、⑥同じく林斉詔の五字対句、⑦林士博の七字連句(二軸)、⑧福州の蔣錫年の七字連句、⑨同じく蔣錫年の七字連句、⑩鶴年書26字などがある。多くは冊封使が渡来したときに入手したものであろう。冊封使が来琉すると、全琉の上下がつ

てをたどってこぞってその書を求めたので、その際に上江洲家に残ったともとれる。あるいはまた久米島に上陸して求めに応じたのかもしれないが、その場合の序や前書、年月日がないので、これを確実に裏付けるものはない。⑨の鶴年は、冊封使一行が福州から出発して、琉球に到着、冊封の諸行事を済ませて帰国するまでを、20景にまとめた、あの美しい見事な『奉使琉球図』の作者朱鶴年であろう。1994年の10月、筆者が曲阜に行ったさい、当地のホテルで行われた古典の書画の売り立ての際に示された「中国書画名人精品拍卖会作者小伝」には、

朱鶴年は1760年に生まれ、1834年没す。江蘇省泰州の人で、字は野雲、幼いころから書画が巧みで、9才で寺の僧のために小さな山水画を書いた。これを見た州の長官は、まさに画家として名を残す人であると賛嘆した。しかし壮年になっても親を養えないほど貧困だったので、銭8百を腰に巻いて徒歩で北上、北京を目指した。途中絵を売りながら食いつないで都へ入り、以後懸命に勉強して山水で知られるようになった。朱昂之、朱本時とともに三朱と称せられる（筆者翻案）。

とあった。あの、冊封使の琉球往来を詳細に描いて資料的な価値も高い『奉使琉球図』は、じつは何時の冊封使のものか分かっていない。上の「小伝」にも琉球渡来の件はないが、もし上の朱鶴年と同一人とすれば、1800年李鼎元来琉の時ではないかと思われる。京にはいってまもなく、いまだ無名の時に、冊封使一行に誘われるままに来琉してあの傑作を生んだのではないか。「鶴年書筆」とだけ署名して、関傍印も落款もないのは、こうした場合の画家に良く見られるもので、『奉使琉球図』の時代を確定する有力な証拠の一つとなりそうである。

三つめには琉球の使者の往来による接触で、①唐榮つまり久米村の梁維陞(1788～1837)は、中国へ使いする途次、道光16(1836)年9月15日から27日まで滞在したことがある。②駱紹業は中国より帰国する時に立ち寄っている。「庚子仲冬」とはあるがいつの頃か特定できない。1780年が古いということであれば、1840(道光20)年ごろか。また上江洲家には、窮民救済の善行を表彰して、尚敬王が乾隆14(1749)年「世濟其美」の扁額を下賜している(現存)。そのために上江洲家をとぶらう者は、その扁額に敬意を表して筆を揮わざるを得ない。③王丕烈国場親方は道光28(1848)年漢文の讃を、④阮宣詔神村親方は咸豐2(1852)年に、⑤林世爵松本親雲上は同治7(1868)年に、それぞれ漢文の讃を寄せている。また⑥富島朝直は同治10年歌文による讃を寄せている。

四つめをその他とした。こうした家に良く見られるものに教訓・家訓がある。①三司官伊江朝睦が嘉慶8(1803)年に書いた「日新様(島津忠良)伊呂波歌」があり、②筆者と筆写年代がともに不明の「一門和睦伝」もこの類である。また③「古語に、成立のかたきを天に昇るがごとしといへり云々」の一幅もこれである。④民話の渡嘉敷ペークーのモデ

ルといわれる葉緝烈渡嘉敷兼副（1750～1844）のかぞえ91歳のときに書いたという「松竹梅」の書幅もある。「松竹梅」の各大字の下にそれぞれ「有歓声」「不改色」「逐年盛」とあり、その下にそれぞれ和歌が書かれているが、劣化して所々判読できないところがある。

⑤⑥護得久朝常の和歌書軸（二軸）はともに上江洲家の繁栄を祝福したもので、これはとりあえずここに分類しておく。

上江洲家の書軸はほぼ以上のとおりで、これでほぼ全体像を掴むことが出来るであろう。しかし上江洲家所蔵の資料には、いまだ表装していない、保存の劣悪なものも相当に残されている。今後はこれらの裏打ち表装も急がれよう。

清晨挂朝衣興手署
新茗騰軒宇金編在
騎寧之嶺修貢貴
嚴作詩論遠水 鄭元偉

鄭元偉書

職別布衣道振武常松漢
明七將營拙麟自越涼文
素於魯二十篇 朱鶴年

朱鶴年書

同治七年戊辰奉使赴閩過頂頭風泊舟於姑米山蕙城
浦聞此地有上江洲其始祖以來繼地頭代職治家有別
供職不急或值凶年所出貨財以脩公家之需又發米粟
以拯貧乏之苦公私之事皆賴於此乾隆十四年
先王賞賜御書世濟其美匾額以獎家風之善行 爵因訪宅升
堂瞻仰
聖諭允為名稱實恭賦律詩一章聊以誌笑矣
潛德由來無不彰山前始末有人卿開先祖武鴻圖壯厥
後孫謀燕翼長雨澤公私苗泰潤風流寵貴桂蘭香登堂
拜訪
天朝賜御筆揚來萬載芳
正議大夫林世爵稿

林世爵（松本親雲上）書

我君の恵みの露にかゝるこの
やどの光の曇るよやある朝常

護得久朝常和歌書